

# 私のアンチエイジング

## 「絶世美人」に出会うまで



邱永漢  
(作家)

私は性来のあわて者で、まだ年をとった自覚の全くなかった四十三歳の時に、将来、日本が高齢化社会になることは避けられないと考えて、サンケイ新聞に「年をとらない法」というエッセイを連載したことがあります。この連載は「新・お金の値打ち」と題して徳間書店から単行本として出版され、のちに「人生後半のための経済設計」と改題して私の全集の中にもおさめられています。その時、厚生省も高齢化に備えて年金制度の充実をはかっているけれ

ども、日本の年金制度は自分たちが若い時に納めたお金を政府が金利をつけて返してくれるわけではなくて、その時、納めた人の年金を同じ時に年金をもらう資格のある人に分配するシステムだから、納める人が多くてももらう人が少ない間は何とか成り立つけれども、だんだん年寄りがふえて年金を納める人よりももらう人が多くなつたら、そのうちに年金をもらえなくなる時が必ず来る。だから、私も家内も厚生年金に入らず、老後に備えて自力で勤儉貯蓄をし

ようと自分に言いかけました。あれから四十何年たつて年金制度の不備が表面化し、政治問題化しています。「だから言ったじゃないの」と私が少しばかり得意になると、歌謡曲の台詞じゃないけれど、「バカはご自分ですよ、年金がもらえなくなるのは子供たちの時代になってからで、私たちの時代はまだちゃんともらえるんですから」とかみさんに一笑されてしまいました。

四十五歳になった時、何となく身体の調子がおかしくなつたので、医者に見てもらったら、何と糖尿病だと宣告されてしまいました。びっくりして当時日本でも一、二を争う東大の権威ある専門医に診てもらい、続いて順天堂の大先生に診てもらって今日に至っていますが、あれからはや四十

年、大した余病も併発させずに生き長らえてきたのは先生方のおかげと言いたいところですが、ちょっと待って下さい。考えてみればこの四十年に糖尿病の理論や治療法もずいぶん進歩しました。でもまだ完全に治りきれないので、もう少ししばらくするとまた新しい治療法に変わるに決まっています。尿に糖が出るのは食べすぎるからだと言っただけ、あれを食べるな、これを食べるなどいまでも言うられています。でも、私に言わせると、車のうしろから黒い煙りが出ているから、ガソリンを入れるなと言われているようなもので、ガソリンを入れなくては車は間違いなくストップしてしまいます。また「運動をしなさい」としきりに言われますが、頭を使うのだからカロリーを消耗するわけですから、「頭を使わない奴は運動をしなさい」というのが正しいんじゃないでしょうか。

というわけで寄る年波に人一倍敏感な私は、もういまから二十何年も前に、スイスはレマン湖の畔にある若返りの病院に夫婦で一週間ほど入院したことがあります。グレッタ・ガルボもチャップリンもチャーチルも、そして、レーガンも入院したときくと、誰だって心を動かされます。一週間の日程の入院ですが日曜日に入院して毎日少

しずつ検査を受け、金曜日にお尻に絞って七本の注射を打たれて、異状なければ土曜日には退院。私たちを案内してくれたグレイセルという香港のアンティ・エイジング・クリームの社長さんが注射の前日になって、「注射は痛いですよ」と余計なことを言ったので、うちのかみさんはカンカンに怒りましたが、翌日、お医者さんが看護婦に注射針をのせた車を押させて私たちの病室に現れ、「どちらからに致しましょうか？」とさくので、思わず「レディ・ファーストにきまっていますよ」と私は大声をあげました。注射針の一本目をさされた家内が「あら、それほどでもないわ」と言ったので私も胸をなでおろしたことをいまでもはつきり覚えていました。

「で、効き目のほどは？」と会う人ことにかかれましたが、二人で飛行機込みで二百何十万円支払った手前もあって家内は「ハイ、あまり風邪を引かなくなりました」と苦しい返事をしていました。

あれからまた二十年がすぎて、いまの私は一年の半分以上を北京と上海と香港で暮らしていますが、それというのうち中国の経済の発展を二十年前に予想し、いくらかでもそのために貢献したいという初志を貫く決心をしたからです。スタートの時点で、

文化や経済の交流は一方的なものではなく、必ず双方方向性になる筈だからと、日本からの経済進出だけでなく、四千年の歴史を持つ中国から日本に受け入れられる文化の遺産は何だろうかとずっと気をつけてきました。

その中で一番私の関心をひいたのが漢方です。西洋医学を取り入れるようになってから日本では漢方をバカにするようになりましたが、漢方には漢方なりの長い歴史があり、理論もあれば実績もあります。人体実験も長期にわたって行われています。その中の一つに癌を手術しないで飲み薬でなおす療法があり、その処方をした王振国さんと親しくなりました。たまたま週刊ボストンの発行部数を百万部まで押し上げた名編集長の関根進さんが退職後、食道癌で危うく生命をおとすところを、王先生の「天仙液」で奇跡的に回復し、十年たったいまも元気で活躍しています。その蘇生の経過を目のあたりにした私はすぐに珠海にとんで王振国さんの病院を訪問し、その時の対談を本にしてグラフ社から出版しています。

二年前に中国旅行団を引率して経済特区の見学に行った折、再び珠海の王先生の研究所を訪問しました。その時、ショールームの棚の上に化粧品が置いてあったの

で、私にはすぐにピンと来るものがありました。すぐに王先生に「あの化粧品、効きますか」とききました。痛に効くのは、王医師が癌細胞を調圧して正常な細胞に入れかえる薬効のある奇跡的な処方を見つけたからにはかならず、内臓の細胞を活性化できるなら、皮膚の細胞に効かないわけがないと直感したからです。「私はもう何十年も漢方の研究に従事してきましたから効くか効かないかの区別がわかります。この化粧品、使ってみて下さいませんか」。そう言っていたいた化粧水をその日から私が実験台になって使いはじめましたが、四、五日もすると自分の顔の皮膚が目立って活気を取り戻すのに気がきました。こりゃ大へんだと私は家内と娘を実験台に追加し、ちょうど私を訪ねてきてくれた東大の同窓生で、生まれも私と同年同日で今年八十四歳になる日本バレー協会の会長薄井憲二君にも実験台になってもらいました。

私が北京に行くとき、「帰りにあの化粧水を忘れず持って帰って下さいね」と家内から電話がかかるし、薄井さんは薄井さんから友達という友達に宣伝係をつとめてくれるようになりまして。とうとう私が名付け親になって顔の肌を若返らせる幻の化粧水に「絶世美人」という商品名をつけたので

す。私とうちの家内と娘はいまも毎日使っています。次に実験台になってくれたのが林真理子さんとユニクロの柳井正社長の奥さんです。でも「絶世美人」は日本では売っていません。もっと詳しいことを知りたい人は「絶世美人」のホームページを見るか、ご面倒でも北京の三金公寓まで足を運んで下さい。私は一日に二回、洗顔のあ

## 健康ならば何だってできる

先日、知り合いの方に、「お元気でですね」と言われて、一瞬きょとんとして、言葉に詰まってしまったんです。「ええ、元気がです」と応えましたけど、暗喩に「それがどうかしましたか？」なんて言いそうになっちゃって。そんな自分の反応に、自分でびっくりしてしまいました。私にとって、元気なのは当たり前のことだから。

何日かに一度は美容院へ行って、フェイシャル・エステをして、きれいにしていただきたいとは思いますが、そんな時間はなかなかありません。それよりも私は、元気が一番だと思っています。体が健康

と、顔から首すじまで塗っていますが、無駄をするのももったいないので、掌に出してからつけています。するとどうでしょう、顔や首すじよりも掌が一足先に三十代くらいのツヤツヤに戻っているではありませんか。

「絶世美人」のホームページ <http://www.weston.com>



草笛光子

(女優)

でさえあれば、あとは私の才覚次第。健康であれば何だってできる、というのが私の持論です。

時間のある日は三十分、四十分、家のまわりをウォーキングしています。家には飼って五年になるラブラドル・リトリバーのマロがいます。私が帰ってくる時、玄関で「次はボクの番だよ」という顔をして待っているの、靴を脱ぐ暇もなく、もう一度出掛けます。

犬はあっちこっち寄り道しながら、ヒラヒラと歩きますでしょうか？ 私は犬に引っ張られながらのジグザグ歩きでなく、姿勢